



ハンガリーにおける中国系補習校の果たす役割

山本 須美子*

The Roles of Supplementary Schools for the Chinese Children in Hungary

YAMAMOTO Sumiko*

Abstract

The purpose of this study is to clarify the roles of supplementary schools for the Chinese children in Hungary based on the fieldwork I conducted in Budapest on September, 2017. I here define supplementary schools as those except full-time schools. There are only two supplementary schools for the Chinese children in Hungary. They are open from 9 am to 3 pm or 4 pm on Saturday and Sunday run by Chinese couples. One school teaches Mandarin, Mathematics, English and History, and the other one teaches mainly English.

Contrasted to the Chinese children in western countries who go to normal schools in each immigrated country, those in Hungary not only go to normal schools but also bilingual state schools or international private schools. After being graduated from them, they tend to go to universities in UK, China and so on. These transnational educational trajectories which are common to the Chinese children in Hungary can't be understood from the viewpoint of school success or failure in the immigrated country. This study clarifies one aspect of their transnational educational trajectories by focusing on supplementary schools. The reason why I focus on supplementary schools is that I could understand parents' educational strategies and the transnationalism in education through supplementary schools, which couldn't be seen through full-time schools.

Firstly, the study traces the historical background of Chinese immigrants in Hungary, and explain the situations of four Chinese markets in Budapest. Secondly, after examining three kinds of full-time schools the Chinese children attend, it clarifies the history and the actual situations of two supplementary schools in Budapest based on the interview with the headmasters. Thirdly this paper examines the educational trajectories of two young Chinese people who have had the experiences of going to one of supplementary schools based on the interviews with them.

To be concluded, it points out that supplementary schools in Hungary are judged by Chinese people by whether they could play the roles for their transnational educational trajectories or not.

* 東洋大学 : Toyo University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, Japan / yamamoto-s@toyo.jp

キーワード：ハンガリー，中国系の子ども，補習校，トランスナショナルな進路選択

Keywords: Hungary, Chinese children, supplementary schools, transnational educational trajectories

はじめに

本論の目的は、ハンガリーにおける中国系の子どもが通う補習校の現状を検討し、それが果たす役割を明らかにすることである。なお、ここでいう「補習校」とは、全日制の学校以外の学校を指す。

筆者は、これまでイギリス、フランスとオランダの中国系の子どもへの教育とアイデンティティをテーマに文化人類学的調査を25年以上にわたって実施してきた〔山本 2014〕。これら3国で生まれ育った中国系二世帯は、親の社会経済的地位は低いが学校に適應し、学校教育を手段として主流社会のホワイトカラー層に進出し社会的上昇を遂げていた。しかし、特に1990年代以降に中国浙江省からフランスのパリに流入した、その多くが不法移民の子どもには学校不適應がみられ、その要因を中国系二世帯の学校適應との比較により検討した。そして、パリの中国系新移民の子どもの場合、親が不法移民であることによる法的・社会経済的不安定さと、親子が長期間離れて暮らす家族の移住形態が、学校不適應の要因であると指摘した〔山本 2014〕。

しかしながら、これらEUの中心に位置する西欧諸国とは違って、周縁に位置するハンガリーにおける中国系の子どもは、正規の学校だけではなく、インターナショナル・スクール、ハンガリー語と中国語や英語のバイリンガル学校、あるいは中国やイギリス等への留学という多様な選択をし、トランスナショナルな生き方を模索している。このようなハンガリーの中国系の子どもにみられるトランスナショナルな進路選択のあり方は、筆者がこれまで対象としてきた西欧諸国の中国系の子どもが捉える主流社会の学校への適應・不適應という枠組みでは捉えられない。本論では、ハンガリーの中国系の子どもが通う全日制学校の多様性を整理した後、補習校に焦点を当ててその現状を検討し、その果たす役割を明らかにすることを目的とする。そして、それを通してハンガリーの中国系の子どもの教育をめぐるトランスナショナルな現象の一面を描き出したい。補習校に焦点を当てることによって、全日制学校のみならず焦点を当てては見えない親の教育戦略や子どもの進路選択のあり方を浮き彫りにできると考える。

ヨーロッパの中国系移民は、東南アジアや北米や太平洋地域のそれに比べて、ほとんど研究されてこなかったが、中国の改革開放政策以降1980年代から中国本土からの新しい移

民の流入が増加し、1990年代から新たな研究対象として注目される存在となった [Benton 1998: vii]。ハンガリーの中国系移民は、1989年の天安門事件が引き金となって流入したが、それ以前はほとんど存在しなかった。ハンガリーの中国系アソシエーションによると、2000年代の中国系人口は約10,000人から15,000人で、全人口の約1%~1.5%を占めている [Huang-McCullough 2005: 34]。イギリスやフランスの中国系人口は各約60万人といわれる¹⁾のに比べれば、ハンガリーの中国系人口はかなり少なくマイナーな存在であり、その先行研究も少ない。歴史的背景に関する研究 [Nyíri 1998, 2002, 2003, 2011] や、ハンガリーにおける福建系移民をイタリアやイギリスの福建系移民と共に取り上げたその概要に関する研究 [Pieke, Nyíri, ThunØ and Ceccagno 2004] がある。また、ハンガリーの中国系の子どもの教育に関しては、ニリーが自身によるブダペストの公立学校での調査や若者へのインタビューに基づいて検討している [Nyíri 2006, 2014]。しかし、本論で取り上げるハンガリーの中国系の子どもの補習校については、管見の限りこれまで研究されていない。

イギリス、フランスとオランダの中国系の子どもの通う補習校は、ほとんどが週末に2時間から3時間中国語を教授しているが、これについて筆者は自らの調査に基づいてその歴史的展開、現状や課題についてまとめた [山本 2014: 149-185]。イギリスやオランダの場合、1970年代をピークに母語である広東語を教えるための学校として設立されたが、2000年代以降は普通話を教えるクラスが増え、3国において近年では普通話教育が中心となっている。ハンガリーの中国系の子どもの通う補習校は、管見の限りではブダペストに2校しかない。1校は中国語だけではなく、数学や英語、歴史等も教え、もう1校は英語を主に教えている。土曜日と日曜日共に午前9時から6時から7時間にわたって開校されている。本論では、補習校2校の発展の歴史や現状、及び親の教育戦略や子どもの進路選択のあり方を検討することを通して、これら補習校が果たす役割を明らかにしたい。

調査方法としては、2016年9月にブダペストにおいて実施した中国マーケットの参与観察、補習校2校の校長へのインタビュー、及び補習校に通った経験のある20代の若者2名へのライフヒストリーを構成するインタビューに基づいている。

論文の構成としては、Iではハンガリーにおける中国系移民の歴史的背景を述べた後、中国系移民の集中するブダペストにおける中国マーケットを4つ取り上げて説明する。IIではハンガリーの中国系の子どもの通う全日制学校の種類について検討した後、ブダペストの中

1) イギリスの中国系人口は、2011年国勢調査ではイングランドとウェールズで約40万人である [Office for National Statistics 2011] が、約60万人であるといわれている。フランスの中国系人口は、1990年代に20万人を上回り、2002年には約30万人で [Marc 2002: 121]、2010年代には約45万人となり、不法滞在者やイタリアやスペイン等に行き来している人やフランス国籍を取得している第2世代を加えると約60万人に達している [Beraha 2012b: 11]。オランダの中国系人口は、約12万5千人である [Luk 2008: 43]。

国系の子どもの通う補習校 2 校の発展の歴史や現状を筆者による校長へのインタビューから明らかにする。Ⅲでは、補習校に通った経験のある若者 2 名の進路選択のあり方を、筆者によるインタビューに基づいて検討する。Ⅳでは、補習校の現状、及び親の教育戦略や子どもの進路選択のあり方を検討することを通して、これら補習校が果たす役割を考察する。

I ハンガリーにおける中国系移民

1 ハンガリーにおける中国系移民の歴史的背景

1989年の天安門事件が引き金となったハンガリーへの中国人の大量の流入は、東ヨーロッパで最初の中国系コミュニティを形成した [Nyíri 2002: 72]。1989年天安門事件以前にハンガリーに流入した中国人は、ロシアから国境を渡ってやってきた、密輸品を売る農村出身の行商人であった [Nyíri 1998: 350-353]。

天安門事件以降政治的不安が蔓延し中国経済が不況に陥った 1989年から 1991年は、東ヨーロッパの社会主義体制崩壊の時期と重なった。ハンガリーでは自由市場が出現し、国内製品には満足できない消費者が安い中国製品を求めたことから [Nyíri 2011: 145]、1990年代始めには、ハンガリーは中国からの輸入品を東ヨーロッパへ配給する拠点となり、卸売業者がブダペストに集まった [Nyíri 2003: 252]。中国人のほとんどは、中国からの輸入品の卸売業や小売業に携わり、西欧のディスカウントチェーン向けに製造された安価な流行の服や靴をハンガリー人に供給することによって、東ヨーロッパのポスト社会主義経済における供給ギャップを埋めた [Pieke, Nyíri, ThunØ and Ceccagno 2004: 130]。中国人経営者の扱う中国製品は、生産コストが安いだけでなく、関税がかからないので低価格であったことと、ビジネス・ネットワークを使って融通性を効かせて客の要求に応えたので人気があった [Pieke, Nyíri, ThunØ and Ceccagno 2004: 130-131]。そして、中国人経営者は、文化資本や流動性、コミュニケーション力を身に付けていたので、中国との密接な関係に依存しながら、ハンガリー人の従業員や秘書、通訳、法律家、会計士を雇って、地元経済とも関連をもっていた [Nyíri 2003: 252]。さらに、1989年にハンガリーと中国間のビザが不要になり、中国からブダペストは列車賃が安く行き易かったことも、中国からの新移民流入の要因となった [Nyíri 1998: 350-353]。移民の多くは 20代から 30代の単身男性で、後に家族が合流した [Nyíri 1998: 353]。

その後 1991年 10月に政府は密輸や不法移民を取り締まるために移民制限を開始し、就労の為の入国は申告しなくてはならず、旅行者や訪問者は就業許可を得られなくなった。中国人には再度ビザが要求されるようになり、新たに滞在許可を申請することは難しくなった。これによって、資金を持たない者や密輸業者、貯蓄後故郷に帰還しようと思っていた者は出

国し、中国系移民の20～30%は強制送還された。1992年の出国者約10,000人の中には、移民政策がより寛容な東ヨーロッパ諸国へ移住する者もいて、1993年までに中国系人口は少なくとも3分の2に減少した。1992年以降ハンガリーに残ったほとんどの中国人は経済的に成功した者であった [Nyíri 1998: 350-353]。その後中国では経済成長が続き、為替レート悪化等から、1990年代中頃には東ヨーロッパへの移住フィーバーは終わった [Nyíri 2011: 145]。

中国系人口は、1991年10月にピークとなり30,000人から40,000人の間であった [Nyíri 1998: 353]。各年の流入人口は、1990年には11,621人、ピークの1991年には27,330人、1992年には10,128人、1993年には7,888人、1993年には8,979人であった [International Organization for Migration 1998: 325]。他方で、1992年にビザが再度必要になり、短期滞在許可の申請と延長が一時的に停止されたので、近隣諸国や西ヨーロッパへの流出も続き、現在の人口は、約10,000人である [Nyíri 2002: 72]。ハンガリーの非白人人口約100万人の内、中国系移民は最も人口が多い集団となっている [Nyíri 2014]。

天安門事件以降初期に流入したのは東北部出身者で、後から浙江省や福建省出身者が続いた [Nyíri 2011: 146]。1999年末には、中国人10,291人の内、19%は浙江省出身者で18%が福建省出身者であった [Nyíri 2014]。特に浙江省と福建省出身者は、イタリアの縫製所や、スペインやドイツ、イングランドのレストランで働く親族を持つ者が多かったが [Pieke, Nyíri, ThunØ and Ceccagno 2004: 134]、多くが最初にハンガリーに移住した [Nyíri 2003: 253]。中国平均より教育レベルが高く、中国人135人の内、45%が高卒で35%が大卒であった [Nyíri 2002: 73]。また、中国では専門職や知識人、学生、ビジネスマンであり、教育レベルの低い行商に携わる農村出身者は少数であった。大部分が経営者として滞在許可を得て事業登録し、ブダペストに居住した [Pieke, Nyíri, ThunØ and Ceccagno 2004: 128-134]。

1995年以前は何でも売れて利益が上がる黄金期であったが、それ以降は競争が激しくなり、為替レート悪化等によって次第に利益は減っていった。資本金の多い企業は、中国マーケットの外でビジネス展開を試み、最新モードの靴や衣服を中国で作らせ、独自ブランドを立ち上げたり、国際的なディスカウントストアやスーパーマーケットと契約を交わした [Pieke, Nyíri, ThunØ, and Ceccagno 2004: 132-133]。

このような中国系移民の位置は、支配者と大衆間の経済的・政治的仲介者として、両者から部外者とされるボナシチが述べた「ミドルマン・マイノリティ」 [Bonacich 1973] と似ていると指摘されている [Nyíri 2011: 146]。ミドルマン・マイノリティの経済戦略は、労働や資本、ビジネス情報を獲得するためにトランスナショナルな流動的なエスニック・ネットワークに頼ることによって、高価格で商品やサービスを提供するものであった [Nyíri 2011: 146-148]。

2012年末には、一定額以上の国債（5年物・金利ゼロ）を購入した場合、国内居住の実績なしでも永住権を取得できる制度を導入した（2015年1月1日からは30万ユーロ以上に引き上げられた）。永住権を希望する外国人本人、もしくは当該外国人が株式過半数を所有する企業が国債を購入すると永住権が取得できる（18歳以上であること、犯罪歴がないこと等は条件となっている）[JETRO ハンガリー（オンライン）2017]。この制度を利用した外国人の多くは中国人で、この数年間で裕福な中国人がハンガリーに移住した。

2 ブダペストの中国マーケット

ハンガリーの中国系移民はブダペストに集中しているが、ブダペストにロンドンやパリのようなチャイナタウンと呼ばれる中華レストランや中国雑貨店が立ち並ぶ地区はない。その代り、中国人が集住し卸売業を営む中国マーケットがいくつかある。以下、主な中国マーケットを4つ取り上げて説明したい。

最大の中国マーケットであったフォータイガー・マーケットは、ビジネスの中心として中国人経営の約1,000店、ベトナム人やトルコ人、ウクライナ人等経営の数百店が集まっていた [Pieke, Nyiri, ThunØ and Ceccagno 2004: 130]。フォータイガー・マーケットは、1980年代にオープンし、質は良くないが、低コストの商品を提供し、日用品を売る小さな店が密集し、地元の人々で賑わっていたが2014年に閉鎖された [XpatLoop HP]。このフォータイガー・マーケットの位置する8区（Józsefváros 地区）は、中国系人口がブダペストで最も多い地区である。19世紀後半からユダヤ商人やロマ等の外来者を受け入れてきたが、特に1980年代までには古びた建物や貧しいロマが多いこと、売春等の犯罪率が高いことによって、ブダペストの中で最もスティグマ化された地域であるといわれるようになった。しかし、ここ15年から20年の間に大きな変化を遂げた。多くの新しい住宅ビルが建設され、おしゃれな飲食店やショッピング・モールがつくられた [Czirfusz, Horváth, Jelinek, Pósfai and Szabó 2015]。こうしたジェントリフィケーションの進行がフォータイガー・マーケットの廃止と関わっていると考えられる。

フォータイガー・マーケットと同じ通りの反対側にはユーロ・スクエアがある。フォータイガー・マーケットよりも多少質の良い価格の高い商品を扱っている卸売業者が密集している [XpatLoop (online) 2017]。筆者は2016年9月にユーロ・スクエアを訪問した。ベトナム人やトルコ人等による卸売業者が店を構えている建物が大通りの同じ側に並ぶ中、ユーロ・スクエアの入り口には「欧州広場」と書かれた看板が掲げられていた。中に入ると、大きな駐車場を囲むように衣服や靴、鞆、日用雑貨、中国食品等の商品を扱っている卸売業者が店を構え、簡体字で書かれた店や広告の看板が目に入る以外、中国的なエスニック表象はみられなかった。

第三は、ユーロ・スクエアからバスで10分位東に位置する10区のモノリ・センターである。このセンターは、フォータイガー・マーケットやユーロ・スクエアとは違って、多くのショッピングゾーンに分かれた小さな街のようである。モノリ・センターの創設者によれば、イタリアやアジアで製造された様々な商品を扱うヨーロッパ最大の卸売センターである。商品の質は良く、価格はリーズナブルである [XpatLoop (online) 2017]。

筆者がモノリ・センターを訪れた印象は、ベトナム人やトルコ人等も行き交うざわついたユーロ・スクエアよりも落ち着いた雰囲気、扱っている商品も高品質であることであった。「Monori Center 唐人街」や「匈牙利福生同郷会」という看板が目に入った。ショッピングゾーンの一つを訪れたが、20軒ほどの卸売業者が駐車場を囲んで店を構えていた。その内の一つである靴の卸売業者は、イタリアのフィレンチェで中国人が生産した靴をハンガリーに輸入してハンガリー人の小売業者に卸していた。浙江省温州出身の60代の夫婦と20代後半の次男夫婦、そして幼子2人の6人家族で、60代夫婦は20年前にフィレンチェからブダペストへ移住していた。20代後半の次男の妻は、15才で両親と共に浙江省温州からフィレンチェへ移住しそこで夫と出会って15年前結婚を機にブダペストに移住した。ブダペストは人が親切で暮らすのには良いが、ビジネスには良くない。そして、このゾーンに位置する店は全て中国人が経営しているのでお互いをよく知っていて、さながら村のようであると述べた。後述する補習校の1つである中加学校は、このゾーンの端に位置している。

第四は、北東部郊外15区に位置するアジア・センターである。これは中国マーケットというよりも、近代的なビルの中にあるショッピング・モールである。オーストリア人が投資し、モールの中の店の経営者は中国人だけではなくハンガリー人もいる。商品のほとんどは、ユーロ・スクエアやモノリ・センターから来ているが、施設やショッピング環境の良さによって価格は高くなっている。しかし、近年できた西欧系ショッピング・モールよりは商品価格は安い [XpatLoop (online) 2017]。筆者が訪れた際、入り口には守衛が立ち、カメラを手に持っていた為内部では撮影しないように注意された。ユーロ・スクエアやモノリ・センターとは全く異なる雰囲気であった。中国的な大きな門や竜の彫刻を施した大きな柱が中国的なエスニシティを表出していた。

II 中国系の子どもの通う補習校の現状

本章では、まず、中国系の子どもの通う全日制学校について3つに分類して説明した後、補習校2校の校長へのインタビューに基づいて、補習校2校の発展の歴史と現状について検討する。

1 中国系の子どもを通う全日制学校

中国系の子どもを通う全日制学校として第一に挙げることができるのは、ハンガリー語を教授語とする公立学校である。

ハンガリーの公立学校では、ハンガリー語が話せない子どもの統合のための特別な措置は取られず、教師個人の援助に頼っている [Nyíri 2014]。政府は 1995 年に初めて学校における外国人生徒の統計を実施したが、教育省のデータによると約 12,000 人である。これは学齢期の子ども の 1%にも達しておらず、全外国人生徒の 45～87%が隣国から流入したハンガリー語を母語とするハンガリーの文化的背景をもつ子どもである²⁾。約半数がブダペストに居住し、多い地区は移民の子どもの割合が 5～8%に達している [Vámos 2013]。中国系の子どもは、中国で数年教育を受けた後で、先にハンガリーに移民した親に合流する場合が多かったが、2000 年代以降はハンガリー生まれの子どもの割合が増えている。中国マーケットのある 8 区は中国系の子どもが多い学校があるが、1 校に数人でありどの学校でも目立った存在ではない [Nyíri 2006]。ブダペストのランクの高い有名高校³⁾には成績のよい中国系の子どもが比較的多いといわれている。

第二は、公立のバイリンガル学校である。最も多くの中国系の子どもが通っているのは、ハンガリー語と中国語のバイリンガル小学校⁴⁾である。この学校は、ハンガリー政府が中国政府と良い関係を築くために 2004 年秋にブダペストに開校した。背後には開校によって中国人投資家をもっと呼び寄せたいというハンガリー政府の意向があった。中国系の子どもは、中国のカリキュラムを学びながら、同時にハンガリー語も学べ、子どもは中国に帰っても困らない。中国政府は資金援助をしていないが、中国と移住先のカリキュラムを両方学べる公立学校は世界でも稀である。授業の 65%がハンガリー語で 35%が中国語で実施され、校長はハンガリー人で副校長は中国人であり、両国の祭日を祝う [Nyíri 2014]。この学校はメディアで紹介されたこともあり、2008 年以降、中国人よりもハンガリー人家族に、子どもに中国語を学ばせることができる学校として注目されるようになった [Vámos 2013]。筆者が 2016 年にインタビューした中国系の若者の内 2 名がこの学校に通った経験があったが、2 名

2) 1989 年の民主化による政治的・経済的変化を受けて、ハンガリーに流入した移民は 3 つの波に分けられる。第一は西ドイツに入るためにハンガリーを経由した東ドイツから流入した約 1 万 5 千人、第二は 1988 年から 1989 年に継続的に流入したルーマニア人、第三は 1991 年から始まったユーゴスラビア戦争によって流入した 212,320 人の移民や難民である [Vámos 2013]。

3) ハンガリーでは学校にランク付けがされていて、そのリストがあり、誰もが参照できる。

4) ハンガリーの学校教育制度では、就学前教育は通常 3～6 年の 3 年間である。初等教育は、基本的に 8 年一貫制をひき、第 1 サイクル (第 1～4 学年) と第 2 サイクル (第 5～8 学年) の 2 段階に分かれる。ただし、優秀な生徒は、8 年ではなく、4 年もしくは 6 年で修了した段階で統一入学試験を受けて中等教育にシフトすることができる。(後期) 中等教育は原則 4 年である。学校形態は、技術中等学校、職業高校、そして 4, 6, 8 年制ギムナジウムと多様である [脇田 2009: 331-333]。

共中国で教育を受けていたので中国語しかできないために、この学校に入学していた。また、英語とハンガリー語のバイリンガル学校に通った中国系の若者もいた。

第三は、英語を教授語とするインターナショナル・スクールである。ここでいうインターナショナル・スクールとは、民族や国籍を問わずに外国籍の子どもたちを主な対象とする私立学校で、ハンガリーの教育システムとは関連がない。ブダペストで中国系の子どもを通うインターナショナル・スクールには、アメリカ系、イギリス系、スペイン系、トルコ系、そして中国系教会の運営するインターナショナル・スクール等がある。中国系の子どもは、アメリカ系とイギリス系の学校に通う子どもが多く、授業料は高く年間200万円以上である。教授語は英語で、英語のできない子どもに第二言語としての英語の補習教育も提供している。このようなインターナショナル・スクールにおける教育は、地元の社会から周縁化されてそこへの帰属意識が弱く文化的経済的資本を通してグローバルな情報源に結びついている集団には特に魅力的であり、ハンガリーで最もそれが顕著なのが中国系移民である [Nyíri 2006: 41]。

さらに、英語を教授語とするインターナショナル・スクールの中には、ハンガリーのカリキュラムに沿った教育を提供しハンガリーの公立学校修了の資格を取得できるハンガリーの工科大学附属学校もあり、ここに通う中国系の子どももいる。

2 光華学院

光華学院は、ハルピン出身の60代中国人女性とその中国人夫が1991年にブダペストに開校した補習校である。筆者は2016年9月11日に校長である中国人女性にインタビューを実施した。それによると、校長は中国では教師、その夫は漢方医であった。1980年代後半に日本に1年半夫婦で留学後、義姉がブダペストに移住していたことから1991年にブダペストに移住した。移住後、校長はユーロ・スクエアの卸売店で、夫は病院の漢方医として働いた。校長はユーロ・スクエアで働く内、そこで目にする中国人の子ども達が中国語を話せず、親が仕事で忙しいので遊んでばかりいることを危惧していた。親に中国語の学校を設立してほしいと頼まれて、義姉の経営していたレストランを借りて、1991年に光華学院を開校した。このレストランはオールド・チャイナタウンといわれるブダペスト北部13区に位置していた。レストランは2部屋しかなく、教師は校長と夫の2人、生徒は16、7人でスタートした。学年はハンガリーの学校教育制度に沿って、第1学年、第3学年、第5学年の3つに分けられ、各学年5、6人の生徒がいた。土曜日と日曜日両日の午前9時から午後4時まで授業があり、中国語と数学を教えた。1998年にはユーロ・スクエアから徒歩20分のところにある広い建物に移転した。教師は夫婦を含めて3人、生徒は約20人であった。その後生徒数が増加し、2004年に近くの全日制小学校の校舎を週末だけ借りて移転した。校長はユーロ・スクエアの

卸売店で、夫は病院の漢方医として働きながら、週末は補習校で教えた。現在夫は、大学教師として漢方薬についてハンガリー人に教えている。夏休みは月曜日から金曜日まで午前中から7時間開校しているので⁵⁾、夫婦は10年以上中国に帰国したことはない。

現在の生徒数は約300人、教師は約20人で全員中国人である。中国の教師資格取得者を雇っている。英語教師2人の内の1人は、アメリカ国籍を取得している。幼稚園レベルから第8学年まであり、第1学年は3クラス、第2学年は2クラス、それ以外は各学年1クラスで、全12クラスである。生徒のほとんどはハンガリー生まれであり、中国から新しく移住した子どもも少数いる。教材は中国から直接輸入している。授業料は安い、どこからも資金援助を受けていない。地元の中国語新聞に広告を出して生徒を募集している。時間割は、1コマ45分で、土曜日日曜日に各5コマある。どの学年も中国語が3コマ、数学1コマがあり、それに加えて、第1学年では体育1コマ、第2学年からは英語1コマ、第7学年と第8学年では土曜日に歴史が1コマある。

3 中加学校

中加学校は、正式名称はカナダ中国語英語バイリンガル学校である。2012年にカナダ国籍で北京出身の60代の中国人女性とその中国人夫がモノリ・センターの一角に開校した。筆者は2016年9月12日に校長である60代女性にインタビューを実施した。それによると、夫婦は25年間カナダで暮らした後、ブタペストに友人がいたので2012年にブタペストに移住し、同年中加学校を開校した。土曜日と日曜日両日の午前9時から午後3時まで授業があるが、建物を終日借り、夫婦はこの学校の運営以外の仕事はしていない。生徒はほとんどが中国系の子どもであり、8割は英語を教え、2割はハンガリー語と中国語を教えている。開校時に6人だった生徒数は、2013年には16、7人に、現在は6才から18才までの約200人に増加し、全7クラスある。生徒はハンガリー生まれの子どもが大半であるが、ハンガリー政府の新移民奨励政策によって、2、3年前から中国から新しく来た子どもも入学している。ハンガリー生まれの子どもは、兄弟が2、3人いて、特に問題はないが、中国からの新移民の子どもは一人っ子政策によって兄弟がおらず問題がある子もいる。ほとんどの子どもが公立学校に通っているが、約2割はインターナショナル・スクールに通っている。インターナショナル・スクールに通っている子どもは、全日制学校でも中加学校でも英語を学んでいるが、英語力に問題がないとはいえない。教師は開校時には夫婦だけであったが、現在では約20人で、中国人がほとんどである。ハンガリー語はハンガリー人教師が教えている。週に2回、大人向けにハンガリー語の教室も開かれ、約15人が受講している。

5) 筆者のインタビューをした若者の中には、6才と7才の夏休みに光華学院に親の勧めで通ったが、ハンガリー人の友人に夏休みに学校に行くなんてと言われてそれ以上続かなかった者もいた。

この学校はアメリカやカナダの教育システムに沿って学年を区切り、現在まだ全学年に生徒がいるわけではない。教科書はアメリカから輸入している。校長は、北京師範大学で物理学を専攻し教師資格を取得し、物理学を学ぶことを通して習得した論理的思考を、英語教育に生かしたいと考えている。中国人が英語を学ぶことは難しく、自らが編み出した西洋と東洋を結び付けた独自の方法で英語を教えることに誇りを持っていた。そして、それを教師に伝えることが重要であると考え、校長は教師研修に、夫は学校運営に携わり、授業を担当していない。教育ビジネスはすぐに結果の出るものでなく、長い時間が必要で、商品販売のビジネスとは根本的に違う。様々な要因を考慮してこの学校の教育システムを構想して、将来的には全日制のインターナショナル・スクールにしたいと述べた。

III 補習校に通った中国系若者のライフヒストリー

本章では、光華学院に通った経験のある20代の女性Aさんと男性Bさんへの筆者によるインタビューに基づいて、そのライフヒストリーを明らかにする。

1 Aさんの場合

Aさんは現在上海の有名大学を卒業したばかりで、9月から上海の他の大学の修士課程へ進学しようとしている22歳の女性である。夏休みに両親の住むブダペストに帰省した折に筆者はインタビューをした。北京出身の父親は1990年にブダペストに移住し、貿易会社で数年働いた後、ヨーロッパの商品を中国に輸出する会社を起業し現在に至っている。母親は1992年に当時10歳の姉と一緒にブダペストの父親に合流し、会社を手伝っている。

Aさんは1994年にブダペストで生まれる。両親は仕事で忙しかったので、6歳までハンガリー人家庭に預けられ、週末のみ両親と過ごした。ハンガリー人家庭に子どもを預ける慣行は、両親が仕事で忙しいこととハンガリー語を学べるので、当時の中国人家族ではよく行われていた。3歳から3年間幼稚園に通った後、第1学年から第5学年までハンガリー語の公立学校に通った。第1学年から第3学年まで通った学校では中国人がAさん一人しかいなく人種的ないじめを受けたので、両親に訴えて第4学年から第5学年は他のハンガリー語の公立学校に転校した。ここでもAさんの他には中国人はいなかったが、学年が上になっていじめは受けなかった。そして、英語を学ばせてもっと良い教育を受けさせたかった父親の意向で、第6学年から第10学年はアメリカ系インターナショナル・スクールに通った。教授語は英語で、1年目は第二言語としての英語コースで学んだ。入学した当初、中国人生徒はクラスに2人しかいなかったが、2年目からは増加した。生徒は、多様な文化的背景を持っていて、英語を学びたいハンガリー人生徒も1割位いた。卒業後、Aさんは上海で暮らした

かったので、上海の高校に入学し寮生活を送った。そして、父の勧めで、上海の有名大学にハンガリーの留学生枠で入学した。留学生枠だから中国の一流大学に入学でき中国語も上達したので、父の学校選択は、今になってとても良かったと思う。大学では広告とマーケティングを専攻し、修士課程では経営学を学ぶ予定である。

Aさんは、6歳までハンガリー人家庭に預けられていたので中国語ができず、7歳から8年間、中国語を学習できる光華学院に通った。自宅から学校まで車で10分位であった。最初は週末に通学するのが嫌であったが、中国人の友人ができたので次第に慣れた。Aさんの第一言語はハンガリー語で、中国語と英語は同じレベルである。修士課程卒業後は、日本や韓国等のアジア諸国で短期間働いた後、中国で就職したいと考えている。ブダペストは好きだが、高収入の職を得るのは難しい。父親は将来的に中国に帰還すると言っているが、もう20年以上もブダペストで暮らし西欧化しているので、多分今後もブダペストにいるだろうと思う。

Aさんには5歳年上の姉がいるが、Aさんと同じようにハンガリーの公立学校からアメリカ系インターナショナル・スクールを卒業し、イギリスに留学し学士号と修士号を取得し、現在はロンドンの投資銀行で働いている。Aさんも姉もハンガリー国籍でEU市民なので、イギリスの大学は学費が安い。Aさんは姉よりも成績が悪かったので、イギリスの一流大学には入れず、中国の大学を選んだ。

Aさんは小さい頃は自分のことをハンガリー人であると思っていたが、今は本当のハンガリー人でもなく中国人でもないと考えている。しかし、それによって悩んだことはない。

2 Bさんの場合

Bさんはロンドンの有名大学を卒業し修士課程に進もうとしている22歳の男性である。Aさん同様に、夏休みの帰省の折にインタビューをした。両親は四川省出身で、父親は中国ではジャーナリストで1994年に特派員としてブダペストに赴任した。仕事がつまらなくなり1年後に退職し、ブダペストで中国料理のシェフとして約5年間働いた後、2000年にブダペスト郊外の小さな村で中国雑貨の輸入店を起業し現在に至っている。店を開店した時に母親もハンガリーに移住し、それ以降母親は父親の仕事を手伝っている。

Bさんは父親がブダペストに移住した1994年生まれで、母親が2000年に移住した後4年間は、両親が仕事で忙しかったので四川省の祖母の元で暮らした。2004年、Bさんが10歳の時にハンガリーの両親の元に合流した。Bさんは中国で既に第4学年まで修了していたが、ハンガリー語ができないので、ハンガリーの公立学校の第1学年に編入した。中国人はBさんだけで他はハンガリー人であり、年下の子どもと一緒に学んだ。新しい環境に慣れやすい性格なので、それほど問題はなかった。夏休みにハンガリー人の先生が特別にハンガリー語

を教えてくれた。また、両親の勧めで、近所に住む退職したハンガリー人教師にハンガリー語の個人レッスンを数年にわたって受けた。そして、1年間第1学年で学んだ後、第5学年に飛び、第8学年までこの学校に通った。結局同い年の子どもとは1年間遅れて卒業した。

Bさんは第5学年と第6学年の2年間、週末は光華学院に通った。Aさんの母親は光華学院の教師である。しかし、第7学年になって公立学校の勉強が忙しくなったので、光華学院を退学した。ハンガリー語は苦手であったが、特に数学に力を入れて勉強し、小さな村の学校で成績が一番になった。第8学年でブダペストでトップ10に入るギムナジウムの入学試験に合格し、4年間通った。中国人の子どもは学年に数人であった。ギムナジウムには成績の良い生徒が集まっているので、Bさんは数学でも良い成績が取れなかった。両親には良い成績を取るように言われ、苦しい時期であった。ハンガリー生まれの現在11歳の弟は、兄が卒業したので、同じ学校の初等レベルに入学試験なしで入学している。

Bさんは、自らの進路について、ハンガリーの大学に進み学位を取ってもそれ程価値がないと考え、イギリスの有名大学5校に入学申請をし、ロンドンにあるその内の1校に入学した。Bさんの大学はイギリスでもトップレベルであるが、中国人の間ではそれ程有名でないと述べた。大学では電子工学を専攻した。入学した当初のルームメイトが中国からの留学生であったことがきっかけで、大学での友人はほとんどが中国からの留学生となり、中国語で話している。中国人留学生といると居心地が良い。大学にはハンガリー人の集まりもあるが、ほとんど関わっていない。

修士課程卒業後は、イギリスで就職したいと考えている。ブダペストよりもロンドンの生活の方が自分には合っている。両親はハンガリーの生活が気に入っていて、今後もハンガリーで暮らすと思う。また、イギリスのEU離脱が決まり先行きが不安なので、現在はドイツ語を学び始め、ドイツやオーストリアで就職することも視野に入れている。

Bさんは、英語とハンガリー語、中国語を状況によって使い分けて使い、どれが第一言語とはいえない。中国語の読み書きはできず、親とは四川語で話す。これまで中国、ハンガリー、イギリスと多様な文化の中で生活してきたが、カルチャーショックを受けたことはなく、新しい環境にすぐに適応して、アイデンティティについても悩んだりしたことはない。

IV 考察

ハンガリーにおける補習校2校は、中国人夫婦が設立運営し、土曜日と日曜日に6,7時間開校している点は共通している。光華学院は、中国系移民の流入が開始された1991年にユーロ・スクエアで働いていた校長が、親が仕事で忙しいので週末にも子どもを教育する学校が必要と考え、夫婦で開校した。イギリスやフランス、オランダの中国語補習校は、ほとんど

が土曜日か日曜日に2,3時間であるのに対して、ハンガリーの場合、学校のない週末に子どもを放っておきたくないという親や校長の意向が、長時間の開校となっていると考える。それゆえ、中国語だけではなく、数学や英語等も教えている。

中加学院は、2012年にカナダ滞在経験の長い夫婦が、オリジナルな方法で英語を教えるために設立された新しい学校で、中国系生徒に主に英語を教える補習校として珍しい存在である。パリには中国系アソシエーションの設立した中国系新移民の子どもにフランス語を教える補習校⁶⁾があるが、それ以外には中国語以外を教える補習校はヨーロッパには管見の限りでは無い。ブダペストの補習校2校とも中国人夫婦が個人的に設立しているのは、ハンガリーの中国系人口が少ないので、中国系アソシエーションに補習校を開校する力がなかったと考える。そして、2校を設立した中国人夫婦は学歴が高く、留学経験があり、補習校を設立できる資質を備えていたといえる。設立者の夫婦は2組共、中国系アソシエーションとの関わりはなかった。

中加学院はまだ設立4年目で卒業生はほとんどいないので、ここでは光華学院に通った経験のある2名の若者にとって、補習校の果たす役割を検討する。Aさんの場合は、6歳までハンガリー人家庭に預けられていたので両親と会話するのは週末のみで中国語があまりできず、8年間光華学院に通ったことによって中国語の能力を身につけることができた。Aさんの進路を決定したのは父親であるが、Aさんと姉をアメリカ系インターナショナル・スクールに入学させ、姉より成績の良くないAさんはイギリスの大学に入学するよりもハンガリー人の留学生枠で中国の有名大学に入学した方が良いと考えた。ハンガリー語が第一言語のAさんは英語と中国語は同じレベルと捉えていたので、中国の大学だけではなく英語圏の大学への進学も選択肢としてはあったと考えられるが、中国の有名大学を薦めてくれた父親の選択を評価していた。大卒の父親には娘を有名大学に入学させたいという思いがあり、グローバルな視点から大学を選択する資質が備わっていたと考える。Aさんによると、両親はブダペストの生活が気に入っていて将来的にもブダペストで暮らしたいと思っているが、娘たちがハンガリーの大学に入学し将来的にここで暮らすことが良いとは捉えていないことがわかる。中国の有名大学に入学したAさんにとって、光華学院での中国語の学習経験は役に立ったといえる。

Bさんの場合は、10歳で中国からハンガリーの両親の元に合流したのでハンガリー語ができなかったが、そのハンディを克服して、ブダペストの有名高校からロンドンの有名大学に入学し卒業した。公立学校ではハンガリー語の補習授業が制度化されてはいなかったが、夏

6) この補習校(巴里同済学校)は、パリの浙江省温州出身者の集住地区であるベルビル地区に1996年に設立された言語文化サポート協会が運営しているフランス語補習校で、公立小学校や中学校とも連携している。2000年代後半には、約80人の温州系の子どもが在籍していた。

休みに教師がハンガリー語を特別に教えてくれたり、両親がハンガリー人教師に個人レッスンを受けさせた。2年間光華学院に通ったが、ハンガリー語を教授語とするブダペストの有名高校に入学するために退校していたことから、Bさんにとって、光華学院はそれ程役に立たなかったといえる。

以上のようにAさんとBさんは、中国とイギリスの有名大学に入学することに成功したが、2名が通った光華学院はトランスナショナルな進路選択に役立つかどうかでその役割が判断されていた。英語を主に教える中加学校は、英語圏への進学に繋がるもので、その役割は明確である。他方、西欧諸国では中国系の子どもは主流社会の学校に通うことは当然として考えられ、週末の中国語補習校は、子どもが主流社会の学校に通うと母語を忘れるので、親の意向を受けて主に中国系アソシエーションが運営母体となって母語を教えるために設立された。しかし、西欧諸国の中国語補習校は2000年代になって母語教育から普通話教育へと移行している。このような西欧諸国の中国語補習校にみられる普通話教育の普及は、グローバルな社会で普通話の有用性が高まっているからである。それゆえ、EUの周縁に位置づくハンガリーだけでなく、EUの中心である西欧諸国においても、中国系の子どもの通う補習校は、トランスナショナルな進路選択との関わりにおいてその役割を果たすことが求められているといえる。

おわりに

2016年7月にイギリスがEU離脱を決めた要因の一つとして、東欧からの移民の大量の流入への反発があった。東欧の人々が、イギリスやドイツ等、EU中心国への移住を望むのは、賃金の高い職が得られるからである。これは東欧に在住する移民の子ども達にも共通し、それが親の教育戦略にも示され、補習校はそうしたトランスナショナルな進路選択において役割を果たすことが望まれている。本論は、ハンガリーの中国系の子どもの通う補習校2校の事例からそれを示した。グローバル化の進む現在、移民が設立する補習校は、主流社会での母語や母文化の保持から、トランスナショナルな進路選択に役割を果たすことが求められるよう変化しているといえる。

本論は、科研費挑戦的萌芽研究、研究課題「ハンガリーにおける中国系の子どもにみるトランスナショナルリズムに関する教育人類学的研究」（研究代表者：山本須美子、平成28年度～30年度）の研究成果である。

参 考 文 献

山本須美子

2014 『EUにおける中国系移民の教育エスノグラフィ』 東信堂.

脇田博文

2009 「EUの言語(外国語)教育政策:ハンガリー共和国——日本の外国語教育への示唆」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』 11: 329-341.

Benton, Gregor

1998 Preface, in *The Chinese in Europe*, edited by Benton, Gregor and Frank N. Pieke, pp. vii-viii, London: Macmillan Press.

Beraha, Richard

2012 *La Chine à Paris: Enquête au Cœur d'un Monde Méconnu*, Paris: Robert Laffont.

Bonacich, Edna

1973 Theory of Middleman Minorities, *American Sociological Review* 38: 583-594.

Czirfusz M., V. Horváth, Cs.Jelinek, Zs.Pósfai and L. Szabó

2015 Gentrification and Rescaling Urban Governance in Budapest-Józsefváros' Intersections, *East European Journal of Society and Politics* 1(4): 55-77.

Huang-mcCullough, Linda

2005 A Review of the Inaugural Year of the Hungarian-Chinese Bilingual Elementary School, in *Fulbright Student Conference Papers II*, ELTE UNESCO Minority Studies Program, Institute of Sociology, pp.31-44.

International Organization for Migration

1998 Chinese Immigrants in Central and Eastern Europe: The Case of the Czech Republic, Hungary and Romania, in *The Chinese in Europe* edited by Benton, Gregor and Frank N. Pieke, pp.320-349, London: Macmillan Press.

Luk, Wai-ki E.

2008 *Chinatown in Britain: Diffusions and Concentrations of the British New Wave Chinese Immigration*, New York: Cambria Press.

Nyíri, Pál

1993 The Chinese Community in Hungary, *The Hungarian Observer* 6-3: 14-19.

1998 New Migrants, New Community: The Chinese in Hungary 1989-1995, in *The Chinese in Europe*, edited by Benton, Gregor and Frank N. Pieke, pp. 350-379, London: Macmillan Press,.

- 2002 Chinese in Hungary and Their Significant Others: a Multi-Sited Approach to Transnational Practice and Discourse, *Identities: Global Studies in Culture and Power* 9: 69-86.
- 2003 Chinese Migration to Eastern Europe, *International Migration* 41-3: 239-265.
- 2007 *Chinese in Eastern Europe and Russia*, Oxon: Routledge.
- 2011 Chinese Entrepreneurs in Poor Countries: a Transnational 'Middleman Minorities' and Its Future, *Inter-Asia Cultural Studies* 12-1: 145-152.
- 2014 Training for Transnationalism: Chinese Children in Hungary, *Ethnic and Racial Studies* 37-7: 1253-1263.

Office for National Statistics

- 2011 March, *Census 2011, Ethnic Group, Local Authorities in the United Kingdom* (Table KS201UK).

Pieke, N.Frank, Pál Nyíri, Mette ThunØ, and Antonella Ceccagno

- 2004 *Transnational Chinese: Fujianese Migrants in Europe*, California: Stanford University Press.

Vámos, Ágnes,

- 2013 The Hungarian-Chinese Bilingual School: Its Characteristics & Students Fluctuation, *PedActa* 3(1): 1-16.

[ウェブサイト]

JETRO ハンガリー

- 「外国人就業規制・在留許可, 現地人の雇用」 2017年3月12日アクセス
https://www.jetro.go.jp/world/europe/hu/invest_05.html

XpatLoop

- "Chinese Markets In Budapest" 2017年2月15日アクセス
http://www.xpatloop.com/news/chinese_markets_in_budapest

山本：ハンガリーにおける中国系補習校の果たす役割